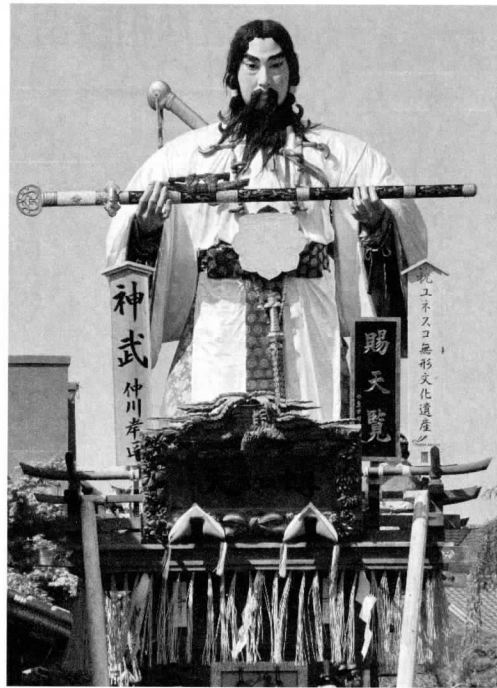


香取遺産

vol. 139

— 明治の佐原が追い求めた究極の一台 — 「仲川岸の山車」



平成29年(2017)撮影



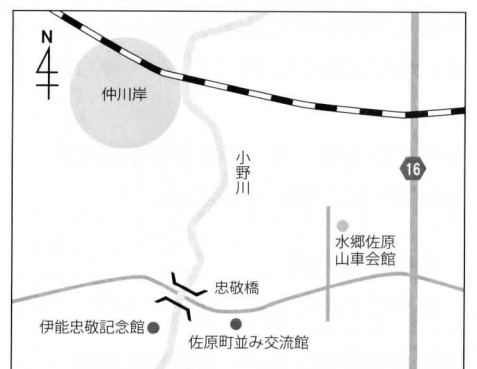
昭和3年(1928)撮影

仲川岸の山車は明治29年(1896)の建造と伝えていきます。白木造りで、材料に九州産ケヤキの一本取り玉杵材を使用しています。佐原の山車は、六本柱が基本的な構造ですが、この山車は三方正面と呼ばれる八本柱の構造となっています。八本柱構造になると、柱と柱の間の空間が増えることになりませんが、その空間をさらに彫刻で埋めることによって、より重厚さを増す効果が得られます。仲川岸の山車には69枚の彫刻がはめ込まれ、日本神話から太閤記などの軍記物まで幅の広い題材となっています。山車1台を使用して、日本の古代から中世にかけての歴史を示すとともに、下高欄周りに米づくりの春秋を配することで、日本の歴史を支えてきたのは稲作によることを論じているようです。彫刻師は後藤直政で、醸造業を営んでいた町内の八木善助宅に、3年間住み込みで製作にあたったと伝えていきます。箱書から、明治29年(1896)の製作であったことがわかります。

山車正面に掲げられている扁額は、明治の三筆の1人、巖谷修の書による「博如天(博きこと天のごとし)」であり、その周囲に天皇家の紋章である菊花と桐花を配し、中央には王家の象徴である鳳凰を配するという構図の彫刻で飾られています。

飾り物は明治31年(1898)製作の神武天皇で、榎原宮で即位した様子を表現していると伝えていきます。原作者は不明ですが、作風から鼠屋もしくはそれに連なる工人の作ではないかと考えられます。その後、昭和3年(1928)、昭和39年(1964)、平成11年(1999)と、三度修復が行われています。威厳に満ちた面差しは、どことなく明治天皇を連想させることから、原作者は明治天皇をモデルにしたのではないかととの推測もありますが、その真意は定かではありません。

仲川岸の山車は、その規模、質において、佐原型山車の到達点を示す名台といえるでしょう。なお、先代の山車は、潮来あやめ二丁目でも現役で活躍しています。神武天皇の前は能「松風」から取材した「在原行平と松風村雨」で、新上川岸、下川岸と同じように複数体の人形を用いたいわゆる「山飾り」であったことが知られています。



岡生涯学習課 ☎(50)12224